

40人2病棟→50人2病棟へ・山形病院(国立施設部会施設見学会)

平成25年10月23日(水)～24日(木)の2日間にわたり、東北ブロック国立施設部会主催の施設見学会が山形病院に於いて開催され、福島病院、いわき病院いずれも施設代表2名が参加し、1日目は平成24年12月に新病棟(6階建、病床数：結核30



床、一般278床 計308床)に移動となった山形病院の視察及び病院との意見交換会、2日目は、宿泊先となった黒沢温泉「喜三郎」会議室に於いて情報交換会を実施しました。

山形病院を訪れた第一印象は郊外型商業施設(Ks 電気やドンキホーテ)が間近にあり、国立施設の立地としては珍しいとの印象でしたが、つい最近までは田んぼのど真ん中で周囲には何もなかったが次々と店舗が建ち並び街が近くなったとのことでした。

病棟は、2階と3階に分かれ、療育訓練等棟は2階に設置されていました。3階の入所者が行事を行う時にはエレベーターでの移動となりますが、最近は移動に要する時間も短くなり、行事にかかる時間を長くとれるようになったとのことでした。

療養型施設の新たな基準が適用された居室は、個室と4人部屋となっておりいずれもプライバシーの確保がなされるようになっていますが、壁と壁の間はガラス張り職員が子どもたちの状況などを観察しやすいようになっています。

常時医療的ケアが必要な子どもたちは、ナースステーションに最も近い大きな部屋に8人が入院しています。

いずれの階にも家族が利用できる面会室(ボランティア室)があり、ソファ、テーブル、キッチンや冷蔵庫が置かれ家族間のコミュニケーションを図るのにはとても利用しやすくなっていました。

2日目の情報交換会では、各々の施設が抱える問題やいこいの家のあり方等たくさんの発言がありました。今回、施設見学会を受け入れてくださった山形病院は、親の会役員の年齢層が一代若いに驚かされました。数年がかりで、役員交代の準備をし、やっと今、役員交代が成功したとのことでした。是非、多くの施設で抱える役員の高齢化に伴う世代交代の参考にしていきたいものです。



【編集後記】東日本大震災から3年が過ぎた3月11日「FM えどがわ(東京)」のインタビューを受ける機会に恵まれた。巡回療育相談に協力いただいている平山 Dr の知り合い(かつての患者)がDJをしていた関係で、Dr が福島病院に毎月来ていることを知り、震災当日のことと現在の状況について、話を伺いたいとのことであったそうであるが、震災当日、平山 Dr は不在であったことから、私に白羽の矢が立ったのである。事前に一度電話をいただき、リハーサル(?)は済ませていた。震災当日のことは伝えられたと思うが、3年が過ぎた現在の状況をうまく伝えられたかどうか疑問である。地震と津波だけの被害であれば、復旧から復興へスタンスが移行している時期であろうが、福島は原発事故により、風評被害といまだに住み慣れた故郷に帰れない人々がいる。(T)

絆 ～きずな～

2014年5月18日 第3号

発行責任者：会長 齋藤秋雄

福島県重症心身障害児(者)を守る会

インフルエンザ

毎冬、猛威をふるっているインフルエンザ。福島病院では12月に罹患者が発生し2月半ばまで面会自粛。

いわき病院では、少し遅れて1月半ばから4月初旬まで面会を控えることに。

いずれの施設でも大事に至ることはなく、春の訪れとともにインフルエンザ菌も影をひそめたようですが、これから毎年冬になるとインフルエンザの流行とともに面会を自粛することになることと思われま。

子どもたちの体力を考えれば、インフルエンザへの罹患は、命にもかかわることになりかねず、やむを得ないことと思いますが、2か月も面会を控えなければならぬことは、子どもたちにとっても、親にとっても寂しいものがあります。



福島病院「わかさ病棟」完成

福島病院親の会会長 車田喜夫

新築移転工事が行われていた「わかさ病棟」が、平成26年3月に完成し、3月17日、めでたく開棟式を迎えました。3月19日には子どもたちが無事新病棟に移ることが出来ました。平成23年に準備工事が始まりましたが、これまでに経験をしたことがない東日本大震災の影響により、本工事も遅れ、完成まで3年もかかりました。このような状況下での新築工事でしたので、院長先生をはじめ各関係者の方々のご苦勞は大変なものがあったことと思います。



新病棟は鉄筋コンクリート2階建てで1病棟60床・2病棟60床の計120床です。1階入口を入ると右側にスヌーズレン室と療育訓練棟、病棟に入ると南側に家族室があり、多目的に利用することが出来ます。

1階は中央にスタッフステーション、西側に広々とした浴室(浴槽はエレベーター浴1台・ミスト浴1台)、南側中央には床暖房のプレールーム。子どもたちの部屋は1床室(個室)が4部屋、4床室が14部屋。2階でエレベーターを降りると右側には1階の療育訓練棟屋上を利用した緊急時の一時避難所があるほか、屋上部分は屋外訓練場として、天気の良い日には日光浴が楽しめます。

中央にスタッフステーション及び浴室、(浴槽は1階と同じ設計)となっており、プレールームは南側、部屋は1床室が4部屋、4床室が6部屋、8床室が4部屋です。各部屋の窓も大きく明るく広々としており、それぞれのベットもカーテンで仕切られプライバシーにも配慮されています。このような環境の中で生活できる子供たちは、本当に幸せです。深く感謝申し上げます。

病棟新築に感謝の想いを

かねてより建設中だった福島病院重症心身障害児(者)病棟(わかさ病棟)が、東日本大震災により工事が遅れていましたが、めでたく完成の運びとなり、去る3月17日に開棟されました。子供たちが慣れ親しんだ病棟から新しい病棟に引っ越し、とまどっている事と気がかかります。新しい環境に慣れるには時間を要すると思いますが、親自身がビックリの新病棟、最初は私も戸惑いました。早く子供たちにもなじみ、又これからは、若きお父さん、お母さんや、ご家族の皆さんにも、いままで以上に足を運んでいただき新しい環境の中、親と親の交流の場としても活用いただけますよう、さらなるお願いを申し上げます。



巡回療育相談会

平成 25 年 11 月 9 日(土)～10 日(日)

財団法人 JKA「競輪公益資金」補助事業

会津地方在住者を対象に、「社会福祉法人 心愛会 障がい福祉サービス事業所 コパン・クラージュ」の一室をお借りして開催した会場形式の相談会には、2年前実施の相談会にも参加された方2名を含め、2歳、4歳、5歳、6歳、21歳の5名の方に参加をいただきました。



2度目の参加の方々は、初回の相談会時よりも、より具体的な相談内容になり、かつ、相談者自身の気持ちも率直に平山先生に伝えることができたようでした。

初めて参加された方々も、時間を気にせずじっくりと相談できることから、症状のこと、日常生活のこと、これからのことなど、たくさん相談され、またそれに対する助言によって、ほんの少しではあるかもしれませんが心のつかえを取り払うことができたのではないのでしょうか。

福島県は、気候も風土も違う会津、中通り、浜通りの3地方に分かれています。東京で雪が降っても雪が降らないいわき市をはじめとした浜通り、かつては日本一雪が多いと言われていた奥只見をかかえる会津、その中間の中通り。

重症児を対象とした施設医療機関についても中通りには、県の療育センターと国立福島病院、浜通りには公法人立の福島整肢療護園と国立いわき病院がありますが、会津地方にはありません。

参加されていたお母さん方からは、冬期間、急に子どもの容体が悪化したときに遠くの病院には連れて行くことができないので、会津にも重症児(者)を受け入れてくれる病院の設置を強く望む声が出されました。

昨年、旧県立会津総合病院と県立喜多方病院が統合され、福島県立医科大学の医療センターとして、設置が決定したときに、短期入所を含めた重症児(者)の受け入れに向けて運動しましたが、残念ながらかなわなかったとのことでした。

2日目は、いわき市内の在宅の方々3名を訪問で相談に応じました。いずれの方々も人工呼吸器を使用しており、日常生活には全面介助を要するケースでしたが、ヘルパーさん等を上手に利用し、介護の負担を軽減することによって自宅での看護を可能にしていました。

しかし、重症児を看てくれる医療機関までは、車でも1時間以上かかってしまい、緊急時の対応に問題が残るケースもありました。

巡回療育相談は、医師や医療スタッフ、さらに行政関係者の協力がなくては開催することができません。相談者との橋渡しをしていただいたコパンの加藤さん、福島整肢療護園の岡本さん、会場を提供してくださったコパン・クラージュの関係者の方々、休日にもかかわらずご協力をいただいた東大和療育センターの平山先生と福島病院の鈴木保育士さん、更にはいわき市の正木保健師さん、なないろクレヨンの日和田所長さんには心より感謝を申し上げます。

守る会では、長年にわたり、競輪補助事業で巡回療育相談指導及び集団指導(療育キャンプ)を実施しています。

平成 25 年度の巡回療育相談は福島、島根、愛媛、奈良、熊本の 5 県で実施されました。また、療育キャンプは、栃木、徳島、群馬、岡山、愛知、高知、千葉の 7 県で開催されています。

公営競技の収益は、自治体の財政の健全化に役立てられているばかりでなく、このような事業開催の補助として社会に還元されているのです。

私の住んでいるいわき市には平競輪場があり、すでに引退していますが友人に競輪選手もいます。競輪学校を卒業して初めて地元で出走するときに友人数名で応援に行きましたが、なぜか競輪選手と親しい人はあまり競輪場に顔を出さないほうが良いと聞かされ、その後は競輪からは距離を置いていました。

友人も引退して久しいことから、たまには競輪を楽しんでみようかと思う今日ごろです。(文責:T)

原発事故による避難生活と、3年が過ぎた今

いわき病院親の会副会長 渡辺 昶

東日本大震災発生に伴う東京電力福島第一原子力発電所の全電源喪失により、原子炉の冷却機能が失われ、町から出された避難指示は、当初2～3日で元の家に戻れると思って避難しましたが、1F—1.3.4号機の水素爆発により放射能汚染が広範囲におよび、原発から半径20km 圏内は立入禁止になり我家に帰ることが出来なくなりました。幸いなことに避難指示が出された双葉郡の中でも、楡葉町は放射線量も低く避難指示解除準備区域に指定され、自由に立入る事ができるようになって3年が過ぎました。

いわき病院に、お世話になっている二人の子どもも震災前は体調が良ければ、2週間に一度は外泊していましたが、原発事故以降全く帰ることが出来ない状態であり、家族との絆が薄れて行くような感じがして心が痛みます。今住んでいる仮のわが家は、エレベーター設備が無い3階にあり、子どもたちを連れて帰ることは困難です。このような状態が何時まで続くのか心配しています。できる限り病院へ面会に行き、子供たちとスキンシップを行って親子の親密感を高めていきたいと思っています。

私も避難生活が長くなりストレスにより体調も悪くなりがちで、日々、手先や体を動かすストレス解消して、ボケ防止等に何か良い方法はないかと考えて始めたのが、仏像の彫刻でした。しかし、思うように彫れず難しいものがあります。

自己流でなく、彫刻の教室に通って基本から学べばより良い仏像が彫れると思いますが、彫刻の教本によると、仏像を彫る前に般若心経「佛説摩訶般若波羅蜜多心経…」と唱えてから、彫刻刀へ気持ちを集中して彫り始めれば、心のこもった仏像が彫り上がるということです。

私の場合は、手先を動かしてボケを防止し、健康維持のために始めた仏像彫刻であり、出来上がった作品は今一であると思いますが、より良い仏像を彫るため今後も数種の仏像彫刻を続けて行こうと思っています。



般若心経は古くから困ったとき日本人のお守りとして使われてきました。あの耳なし芳一も亡霊に連れて行かれるところを、和尚さんが芳一の全身に このお経を書いて守ってもらったのでした。(耳にだけ書くのを忘れてしまった) そう言えば、ちびまる子も困ったとき般若心経を唱えていましたね。(HP:心のページより転載)